

新春の二人書展を終えて

美術協会書道部 田村 元帥

私が書の世界に入ったのは小学3年生のころ、近所の書道教室に通い始めたのが切っ掛けです。

2009年6月、17歳の終わりに現在の師である伊丹東龍先生の教室の門を叩き、師弟の関係となりました。

点画、払いを丁寧に書いていた学生書道の筆遣いとは一線を画す、リズム感と遅速の変化、そこから生み出される線に驚嘆。

自信満々で伸びきった鼻が、ポキリと音を立てて折れる音が聞こえました。

悔しさ半分、興奮が半分。紙面を滑る筆の滑らかさ、線の美しさに魅了され、自分も書けるようにと毎日練習を重ねました。

運にも恵まれ2016年の初入選から3年連続で日展入選。

2018年に阿南市の文化奨励賞を頂きました。

2022年の秋頃に文化協会的事

務局からお話を頂き、2023年1月に、同門の佐竹夏実さん（2022年文化奨励賞受賞）と一緒に阿南市役所1階多目的スペースにて二人書展を開催することが決まりました。やるからには徹底的に拘った作品制作を心がけ、墨・紙・表具など、コスト度外視で作品と向き合う日々が続きました。

数カ月に及ぶ作品制作を経て、阿南市役所において2023年1月20日〜29日までの書展を開催。

搬入・展示が終わった後は、2人とも万感の思いで作品を眺めていました。

多くの方にお花をお送りいただき、会場に彩りが足されたのも大きな会場効果となったかと思えます。

仕事の都合があり2人とも土日しか在廊できませんでしたが、ありがたいことに県内外から多くの方にご来場いただき、盛況の裡に会期を終

えることができました。

書は黒と白のみで構成されている線の芸術です。

もちろん書く内容や造形も重要ですが、やはり一番は線質だと考えています。

強い線、切れ味のある線、柔らかい線など、いろんな線があり、さええた線の中にこそ美しい余白が生まれるものだと確信しています。

徳島県を代表する書家である小坂奇石先生は自らのことを「線の行者」と呼んでいたことから書においていかに線が重要かが分かります。

二人書展の作品についても、特に線に重きを置いて枚数を重ねましたが、まだまだ自分の引き出しの中に多くの線のバリエーションが無いので苦心の制作となりました。

展覧会を通して自らの課題も改めて確認でき、いい勉強の機会を頂け

たと思います。

日常生活の中で書に触れる機会が少なくなっただけでもあり、書道人口は減少しつつあります。

パフォーマンスや、奇抜な造形のアートとしての書のおかげで書に親しみを持つ方も少しは増えてくれたかと思いますが、もっと深い書の芸術性を理解できる、線を見る力がある人もほとんどいないのが現実です。

また、書き手のレベルが下がってきているのも実情です。

誰もが理解できずとも不思議な感動を与える線を書けるようになるべく、ただ愚直に古典に向き合い、自らの線質を鍛えていきたいと思えます。

あなん文化紀行は偶数月号に掲載します。

問い合わせ 文化振興課

☎ 22-11798

